

「キリストと教会の奥義」

創世記
エペソ人への手紙

第2章18節～25節
第5章22節～33節

説教 岡村 恒牧師

「この奥義は大きい」とても大胆な言い方で、聖書は主イエス・キリストと私たちとの間にある関係を描き出します。この奥義さえ私たちが知り、信じて握りしめて歩むなら、それは私たちの人生全体を支えるし、また私たちが地上の旅を終えて死の眠りに就く時さえ恐れと不安、悲しみから私たちを解き放つ奥義だと聖書は言います。この奥義とは一体何の話でしょうか？

代祷の祈りの中で、二人の方が昨日今日と相次いで地上の旅を終えたことに触れました。また、今日の礼拝の後には、昨年秋に召された姉妹の記念会を行います。記念会というのはただの追悼のような集まりではなく、一緒に神の御言葉を聞きながら召された方を記念し、その信仰の歩みにならい、私たちも祝福と恵みを受け継いでいくようにと、一緒に確認をして励まし合う礼拝です。

受難節の歩みの中で、教会の群れの中から愛する兄弟と姉妹が取り去られ、また半年程前に召された姉妹の記念を行うことは、決して不思議な出来事ではありません。受難節は一体何のための時かということ、葬儀や記念会は良く表わしている出来事です。

今日お読みした二つの聖書箇所は結婚式の準備の時に丁寧に説明し、また結婚式の中で朗読をします。天地創造の最後に、神が人を創りその人を男と女にされた、二人の人が互いに助け合って、一つに結び合って神が与えて下さる命と祝福を味わって生きようと神がお定めになったと記された聖書の言葉です。そしてエペソ人への手紙は信仰を持って生きる者が夫と妻という二人の人として愛し合い助け合って生きる時、そのただ中で神の国の奥義が明らかになると話を記しています。

夫はその命の全てを妻に与えて愛し抜き、それに応えるようにして妻は夫を敬い夫に仕えて、共に神の祝福を受けて生きようと目指して歩みだした途端、私たちはいつでも挫折を味わいます。本当に人を愛し抜くことも人に仕え抜くことも私たち自身の力では出来ないからです。

しかしエペソ人への手紙を見ると、ほとんどの文章の主語は夫や妻ではありません。キリストです。畳み掛けるように描かれているのは主イエス・キリストが私たちのために何をして下

さったか、主イエスの十字架の死が何のためであったかという話です。

神の子イエス・キリストが、なぜ最もむごたらしい刑罰であった十字架刑に処せられ、手に釘を打たれ血を流し、脇腹を槍で突かれたのか。壮絶な痛みを味わわれた上に、さらに痛々しいのは、天地を創られるその前から神と共におられたお方が、神に棄てられる究極の絶望を味わい尽くされたことです。

イエス・キリストは、神に棄てられる理由などどこにも無いお方でした。神に棄てられる必要の無い方が、味わう必要の無い絶望を味わい尽くして下さいました。それは、私たちをキリストとひとつに結び合わせるためです。

キリストは教会のかしらであり、教会はそのからだである。このふたつは、決して切り離されることの無いひとつの命を生き、一つの血が体と頭を駆け巡ります。私たちは聖餐礼拝のたびに、これはキリストの体これはキリストの血潮、そう聞いてパンを頂き杯を飲み干します。イエス・キリストの命を皆が共に受け止め、パンが私たちの肉となり、ぶどうが私たちの血潮となるようにイエス・キリストの命そのものが私たちの体を駆け巡ります。私たちはキリストに結び合わされて、キリストの命をいただいて生きていることを繰り返し確認します。今日のみ言葉が語るとおりです。

聖書は神の国の奥義、神の深い愛の計画を明らかにしています。主イエスご自身がご自分の命を捧げて、私たちをキリストの花嫁、キリストに結びつく者へと洗いきよめて下さいました。

また、誰でも主イエスキリストを信じる信仰を告白して、罪の赦しの洗礼を受けるなら、その人もキリストの花嫁である教会の枝として結び合わされます。これが聖書の約束です。そして神の子キリストと結び合わされた者は、地上の旅を終えてその肉体が土のちりに還っても、それが絶望的な終わりではないことを知っています。やがて主イエスキリストの再臨の時、キリストに結び合わされたことの奥義が、どれほど光り輝く恵み豊かな喜びに満ちたものであるかを全身全霊で味わうことになるのです。

(記 説教要約奉仕者)